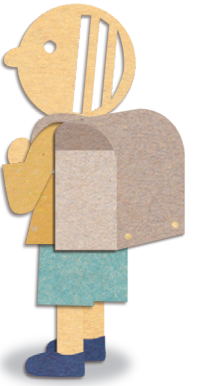


空っぽのランドセル



六年生の次男のランドセルは行きも帰りも空っぽ。勝手にすべてを学校に置いてきています。空なのにランドセルは持っていくんだ？ くらいにしか思っていないかったのですが、先日、担任の先生から電話をいただきました。「家庭へのお知らせが全て机の中に押し込まれていましたが、明日運動会だということはご存じですか」って！ 運動会は知っていました。が、そういうえばプログラムも何も次男から渡されていないことにやっと気づきました。三人目ともなると運動会への親の意気込みはこんなもの（笑）。本人はダンスが嫌いなので、そもそも毎年乗り気ではありません。

しかし当日、次男は思ったよりずっと、ちゃんと踊っていました。幼稚園のころから運動会のダンスを踊らない子で、目立ってしまっていたのですが、そこまで悪目立ちしないくらいになっていました。今年も本人には振り付けを覚える気がなく、「前の

無意識に拒否していたようです。心因性難聴の治療法はないものの、数々の検査やカウンセリングの結果から、アドバイスをいただきました。

まず彼は耳からの指示が入りにくい特性を持つていること。IQが低めであり、注意力も散漫のため、集団授業に向いておらず、マンツーマンじゃないと頭に入らないこと。スポーツなども、指示を聞いて脳で理解し動くものだから、何をやってもうまくはならないことなど。

「だからお母さん、この子に向いているものは何か、なんて探さないでください。そんなことをしていたら、お母さんが疲れてしまいます」とまで言われました。たしかに、苦手なことがある分、芸術分野などで秀でた何かを持っているかもしれない、とにかくいろいろやらせてみようとしたかもしれませんね。でも先回りして言われてしまいました。

しばらくは衝撃で呆然としました

人の動きをコマ数秒で真似すること豪語していましたが、確かにそんな感じでした。それでも大きな成長なのですよ。

自分が興味があるかないかで、自由にやるかやらないかを決めてしまいう次男。幼稚園の間はその自由が許されていましたが、小学校に入ったら、先生の指導もそういうわけにはいきませんよね。

入学後しばらくして、次男は難聴になりました。学校の聴力検査で、耳鼻科受診をすすめられ、まずは近所の耳鼻科へ。地域の基幹病院を経て、さらにはこども医療センターへ。何度も学校を休んで、検査に通いました。診断は心因性難聴というもので、耳の機能的には聞こえるはずだけど、精神的な原因によって本当に聞こえづらいとのこと。受験のストレスなどで患ってしまう子もいるのですが、次男は小学校に入学し、「全員同じようにやるのが当然」を

が、あれだけはずり言われて、むしろよかったです。そういう特性を持った子であることは、目を逸らさずに理解しました。理解した上で、普通に育ててきました。だって、集団生活はこれからもついてまわるわけですから、そこでどう過ごすのか、本人が処世術を身に付けるしかありませんよね。

あの診断から五年。心因性難聴はおそらく治っています。嫌いなダンスも全体に合わせるようになりました。ランドセルが空なのは、あまりにひどい忘れ物をなくす工夫のようです。次男の成長はほかにありません。続きは次回、聞いてください。



文・写真
小宮華寿子
二男一女の母で
編集者。「ブラジルの
手しごと」著。
ジュエリーと世界の手仕事ワーク
ショップの店「メルカジーニョ」
代表。(https://mercadinho.net)



イラスト・
デザイン
寺沼麻美
切り絵作家、時々
デザイナー。「ゆ
らゆらゆれる北欧風手作りモビ
ール」(ネコ・パブリッシング)を監修。